

佳作

## 博愛の精神とは

福井県 福井市社中学校一年 安富 元政

戦後八十年。新聞の戦後八十年の特集記事がふと目に入った。

シベリア抑留を経験したおじいさんが、約二年の抑留を終えて故郷の島に戻ってくる。そして、また島で暮らし始めたおじいさんは、毎朝毎夕、ロシア兵の墓に通って、草取りなどの墓の手入れをするようになったという。

僕は疑問に思った。自分をつらい目に合わせた相手国の兵士の墓を、なぜ手入れしようと思うのだろうか。シベリア抑留を経験しているおじいさんは、ロシアのことを好きであるはずがないのに、恨みや憎しみでいっぱいだろうに。

おじいさんの言葉を読んで、心が痛くなった。「一人間として祖国に帰りたいという思いは一緒にここに眠るロシア兵は、帰りたくても帰れなかった。生きて帰ってくるのが出来た感謝の気持ちを込め、

せめて墓の世話はしてやりたい」。

こんなふうに話せるおじいさんの心は、なんて美しいのだろうか。僕が思ったようなロシアへの恨みや憎しみは一切なく、同じ人間としての温かさで満ちている。僕は、自分の心の冷たさに恥ずかしい気持ちになり、心が痛くなったのだ。そして、心が温かくなった。

おじいさんは、「人間はみな平等」と話す。戦地に向かう兵士たちだって人間だ。本当は戦争をした人間なんているはずがないと思う。おじいさんのような心を見なが持ち合わせていれば、戦争が起これりそうになった時でも、その一步を踏み出さずに済むだろう。

日本に住んでいると、戦争は遠い国の話だと考えてしまいがちだが、小さないざごは僕の周りでも毎日のように起きる。その時に自分の主張ばかりでなく、相手の気持ちも考えて行動することが大切だろう。「人間はみな平等」という気持ちを忘れずに。

僕は、自分がやりたいことをしたいし、それ以外のことはあまり興味がなかった。そうやって今まで生きてきた。周りの人が何をしようが、どう考えようが、僕には関係ないことだと思いうことすらあった。だが、このおじいさんの記事を読んで、自分以外の

人のことも考えて生きてみようと思うようになった。相手を思う気持ち、同じ人間なのだと思ひ添う心、これが博愛の精神なのだ。

「博愛の精神」と聞くと、何かとてつもなく大きなもので、僕たちの日常生活とはかけ離れたものだと思いかもしれない。しかし、「博愛の精神」は実際にあり、その精神に感動した今年の夏だった。